

# ♪ シニア便り ♪



第 9 号 (2006年7月発行)

発 行 北海道シニア吹奏楽団 事務局

編 集 『シニア便り』編集部

「こんな子に育てた覚えはない……」

問 あゆみ

そう母親に言われたのは、高校時代でした。なんとなく入ったハズの吹奏楽部にどっぷり浸かり、体調が悪く学校を休んだ日でも、部活の時間になると学校に行っていたためです。三年間、私は「ホルン」を吹いていました。しかし、自分の楽器をやるお金があるはずもなく、部活引退とともに楽器と離れなければなりませんでした。

どうしても楽器を吹き続けたい……そう思っていた卒業間近の頃、「クラリネット」を買ってくれないかなあ」という話がありました（今思えば、Sさん、安く売ります）。ヤマハの木製の楽器が一万五千円。これならどうにか親にねだれる……私に迷いはありませんでした。親にお願いで、その楽器を買ってもらいました。卒業後に先生を探して、レッスンを受けることにしました。ホルンで左手四本しか使っていなかった指を、今度は両手合わせて九本動かさなければなりません。とてもアンブシユアから何から、独学で覚える自信はありませんでした。始めた年齢が遅かったこともあり、回り道はしたくありませんでした。楽団に所属することなく、レッスンのみ受ける日々が二年間ほど続きました。

「合奏に参加したいなあ」。そう思い始めた頃、道新で「初心者の方でも教えます。一緒に演奏しませんか」という記事が目に見え込んできました。オーケストラでした。管楽器に関しては、それなりの経験者ばかりでしたが、社会人になつてから仕事の都合で練習に通えなくなるまでの三年ほど、ここで演奏することになりました。

オーケストラを辞めたあと、他のオーケストラの空きを探しましたが、みんなこの数席を逃すまいと、入団したら辞めないのです。空きなんてありませんでした。どうしてもどこかで吹きたい。意を決して地元で吹奏楽団に入団しました。数年Bトクラリネットでがんばりましたが、どうしても超高速指回しと超高速タングリング（多分普通の人にとつてはなんでもない速度）についていけず、音符の単位が大きそうなるバスクラリネットを買って移りました。以前「クラリネット」にはいろいろな種類があるのだから吹いてみたいよね」という、(多分)先生の独り言に感銘を受けていた私は、ここで「クラリネットおたく」への道を歩み始めます。

北海道シニア吹奏楽団は、インターネットを探して当てました。唯一時間の空いている日曜日に練習していて、コンクールに参加せずに、少しでも気持ちるを穏やかに楽しく楽器が吹きたかった……そんな私の理想にぴったりでした。見学して

なお一層「ここでなら楽しく吹ける」。そう確信して、即入団を決意しました次第でございます。

私的な経歴を書き綴ってしまいました。乱文で申し訳ありません。これからも末永くよろしくお願ひいたします。

『私の吹奏楽雑記帖』

副団長・常任指揮者 中村 暁 生

(五) 国歌 君が代

陸上自衛隊と東京消防庁の音楽隊でブレーヤー(或いは指揮者として約四十年、いろいろな場所や場面で演奏しましたが、最も演奏回数が多い曲と言ったらダントツで国歌「君が代」です。

「君が代」の歌詞は作者不詳の古歌ですが明治政府がこれを選び、一八八〇年宮内省式部寮雅楽課に委嘱して作曲を募集、選ばれた奥好義(おおく よしいさ)の作品を宮内省楽師林廣守(はやし ひろもり)が補筆訂正して、一八九三年八月十二日の官報で林廣守作曲として公布され、国歌として制定されました(以上音楽辞典より)。

現在も使われているピアノ伴奏や吹奏楽用のあの荘重な和音を付けたのは、一八七九年から一九〇〇年まで海軍軍楽隊の講師として招聘されていたドイツ軍楽隊の指揮者であり作曲家であったフランツ・エッケルトです。

レドレミソミレで始まりドレラソランミレで終わる雅楽の旋律に、ドミソの和音

で始まり終わる古典和声法による和声づけは流石のエッケルトも困り果てたあげく、最初と最後をユニゾンにして完成させたのです。

余談ですが、編曲の極意の一つに「困つたらユニゾン」と言うのがありますが、当時エッケルトはそれを知っていたんですね。

国歌「君が代」については現在もいろいろな論争がありますが、私は東京オリンピックをはじめ各種の国際競技大会や、迎賓館での国賓歓迎行事で各国の国歌と一緒に演奏してきて、「君が代」は歌詞も含めて実に簡潔で穏やか、音楽的にも優れた世界に誇れる名曲であると同時に感じていましたし、今もそう思っています。

さて、話は二氣に昭和二十八年(一九五三年)にタイムスリップします。

自衛隊では平日の八時に国旗を掲揚し、十七時に降下しますが、その時「君が代」が流れます。現在では殆んど録音されたものを使っていますが、当時はライブでした。朝の七時半と夕方の四時半(土曜日は十一時半)になると、制服に着替えて管区總監部庁舎までの約三百メートルを行進曲「大空」で演奏行進、時報と同時に「一気をつけ」のラップが鳴り、「君が代」を演奏終わると再び演奏行進をして帰るこの行事は駐屯地周辺では人気があり、飲み屋のオーナーチャンを交えた大勢のギャラリイが正門前にいつも集まっていました。これが毎日の大事な仕事でしたから一年で軽

く五百回は演奏していたわけです。

ある日、旧海軍軍楽隊出身の助教から声が掛かりました。「おい、中村、君が代は何小節ある？」「うーん、数えたことがないんで解りません」「バカもの！ それでは音楽隊員失格だ！」

みなさん、「君が代」は何小節で出来ていますか？

### 『シニアらしき快考』

事務局長 渡辺 順三

最近、団の内外から「もう大丈夫だね」といふ、そんな声が多く聞かれます。

確かに、二二教年は団員数も四十名を確保していますし、昨年の演奏会は宮の森小学校の協力もあって、ほぼ満席という盛況でした。二二三年で駄目になると思っていた」と言う団長のかつての一言が思い出されます。「求めよ、さらば与えられん」シニアを求める団員の強い思いが、団長の予想をはるかに超えたということであり、まずこれまでは、順調な発展といえるのではないのでしょうか。

これからもシニアは、音楽を楽しむことを主眼とします。音楽レベルを上げて、他の楽団と競い合うことは致しませんし、もちろんコンクールは不参加です。今後とも、団員数の緩やかな増加に伴い、活動も次第に拡大していくことが予想されますが、大切なことは、シニア設立の原点をしつかり守ることです。どう環境が変わろうとも、決して変えてはならないも

の、それが「シニアらしき」です。「シニアらしき」を大いに楽しみ、明日へのエネルギーにしましょう。

シニアの特徴は年齢不問、腕前不問、ヘタクソでも高齢者でも、技術を気にせず吹奏楽を楽しみ、世代を超えた団員の交流を深めていることです。企画委員会がまとめたくれた団の基本姿勢には、「技術差を負担に感じたり、気後れなどの意識を持たないよう、仲間意識を高め、知恵と工夫と気配りで、楽しい雰囲気醸し出す努力を怠れないことである(シニア便り第四号)とあります。現在の呑み会、シニア便り、コーヒータムなど、シニアらしい本当に良い企画だと思えます。

シニア便りの一部を振り返ってみますと、「上手も下手も、老いも若きも、みんなコーラスライン(全員主役)(第二号)」「月一度の呑み会を楽しみにしています(第二二六号)、団長曰く「合奏は、吹かないのも技術の一つ(第五号)」「経典の長さ、技術の有無は問いません」にピピッときました(第六号)、「第二・四日曜日は、ノンスケジュール。ジジイの青春を謳歌するぞ(第六号)」「音楽とは、音を楽しむこと。楽しくなかったら音楽じゃない。「シニア」でやっていて楽しいと感ぜられたら、ここに居る資格があるんだよ(第八号)。他にも、「OH! イ・シニア」作曲秘話、実行委員会秘話、退団者の悔しい絶叫などなど、シニアと出会えた団員の喜びのメロディが踊っています。

ます。

シニアでは、他には入団できない、あまり上手でない人こそ主役であり、それを暖かく支え、楽しく一緒に吹いてくれる上手な人が主役です。同じく、どこから入団を断られる年長者も主役であり、世代を超えて共に楽しく交流してくれる若い団員も、とてもありがたい主役です。かつて青春時代、吹奏楽に明け暮れた人は、いったいどれほどの数になるのでしょうか。そのほとんどが、音楽とは無縁の毎日でしょう。シニアと出会えた、ほんの一握りの我々は、その幸運に感謝し、シニア設立に奔走して下さった団長はじめ多くの方々に感謝すると共に、シニアの未来に向けての責任を自覚しなければなりません。

もし皆さんが今、シニアを知り、入団を希望するとしたら、今の対応はどう見えるでしょう。共演の小学校には毎回、「発表の機会の少ない小学校を対象にしております」と伝えておられますが、同じように、演奏機会の無い入団希望者に対しては、「一緒に楽しみましょう」と迎え入れるべきではないでしょうか。もちろん、パートの意向を尊重し、パートの結束を最優先とします。「二年間は若菜マークですよ」の一言も付け加えます。多少のバランスの悪さも、「シニアらしき」でごまかしましょう。シニアには、年齢も技術も音色もバラバラなものを一つの音楽にまとめ、なんと観客から拍手までも

らってしまふ、狂歌使いの中村先生がいま。年齢と腕前を超えて音楽を楽しみ、仲間と交流する、このすばらしいシニアをひとり占めするのは、「シニアらしき」に反するのではないのでしょうか。人が増えれば問題も増えるでしょう。しかし、楽しみや喜びは、その何倍も広がるはずで

す。  
チューニングの音も、チップスの一ページ目も、「シニアらしき」から始まりです。「カンパニー！」の声も同じです。みんなで共に手を携えて、「シニアらしき」を共有し、謳歌していきましょう！

### ANNOUNCEMENTS

A 今年の定期演奏会は十二回目だけで、再来年になったら十五回目になるんだよね

B 早いものだね。林団長が、シニアは「二二三年で駄目になると思っていた」と言っていたぞうだけども、ここまで来る「こと」ができたなんてねえ……

A Bさん、感傷的になるのもいいけれど、十五回目にふさわしい企画を、今から何か考えてみないかい？」

B 「うーん、そうだなあ。例えば、『世界のマーチ』というのはどう？ アメリカならスーザの『星条旗よ永遠なれ』、ドイツならタイケの『旧友』、フランスならガヌヌの『ローレーヌ行進曲』、そして日本なら團伊玖磨の『祝典行進曲』などなど、教えあげればいろいろ出てくるよな」

## チューニング広場

A「マーチでプログラムを固めるといふのは、ありそうでなきそうな試みだね。ところで、ある団員が言うには、再来年は昭和三年（一九一八年）に最初のラジオ体操第一（一）が制定されて八十周年にあたるそうだよ。しかも、伴奏をシニアのみならず、ということも可能な体操があるそうなんだ」

B「シニアが伴奏してラジオ体操？ ちょつとピンと来ないなあ」

A「昭和七年（一九三二年）に制定された初代の第一体操には、伴奏の音楽が複数あつてそのうちの二つがドイツに伝わる『ポーエンフリートベルク行進曲』の一部旋律を繰り返して使っているそうなんだ。作曲者は不明だけど、フリードリヒ大王が作曲したという説もある。原曲はカラヤンも録音しているんだよ」

B「へえー！ 実現するかどうかはともかくとして、十五回目の定演にラジオ体操八十周年が重なるというのは、偶然とは言え事実なことなんだね。そういえば、去年のラジオ体操実演が実現したのは、パークゴルフ大会が終わった後のお酒の席で出た話がきっかけになつていてさうだよ」

A「うん。だからみんなには、コーヒータムや呑み会などの機会に、十五回目の定演に向けたアイデアを、どんどん出してもらいたいよね」

B「僕もそう思うよ」

※この会話はフィクションであり、実在の団員とは一切関係ありません。

去る五月十三日、平成十八年度定期総会がラマダホテル札幌において開催されました。林団長が昨年に続き出席され、終了後の懇親会にも参加されて、団員との交流を楽しんでおられました。

総会では、山田光国さんを議長に選出し、会の成立が宣言された後、議案の審議に移りました。平成十七年度収支決算報告（監事の林重勇さんから監査報告あり）、平成十八年度予算案ともに承認されました。

十七年度の事業報告が渡辺事務局長からあり、池田あみさん（トロンボーン）の復帰、退団した花野瑞穂さんから指揮者用譜面台の寄贈、コピー機の更新、トランクルームのレンタル、シニア便りの年三回発行などが報告されました。

第十二回定期演奏会については、実行委員長だった林重勇さんより、来場者アンケートは百十三名から回答があつて、おおむね好評だったこと、これに対して団員のアンケートは参加三十六名中二十二名の回答にとどまり、もう少し多くの団員からの積極的な回答や、より建設的な声がほしかったことなどが報告されました。

さらに、常任指揮者の中村副団長からは、昨年の定期演奏会の成功に対して、林実行委員長をはじめとする団員の協力への感謝と、今年もより良い演奏会にし

たいとの思いが述べられました。これに関連して、シニア吹奏楽団は各種の行事などによつて、音楽を通じた人と人とのふれあいや交流を一番大切にしていること、団員の「この団を長くしていこう」「シニアの特色を強めていこう」という意欲を感じること、そのような団の方向性は間違っていないことなども述べられました。

自身の後継者や副指揮者を置くかどうかについては、団員からも意見を聞いたしながら考えていきたいとのことでした。

再び渡辺事務局長より、十八年度の事業計画の報告があり、第十三回定期演奏会は三浦実行委員長のもと、実行委員会便りの発行をはじめとする活動をすでに開始していることが伝えられました（小学校との共演については、総会の時点で交渉中でしたが、その後、札幌市立旭小学校より内諾が得られ、現在は実現に向けた調整が進められております）。

ちなみに、総会当日の五月十二日は、不慮の事故で一昨年に急逝された佐藤前事務局長の命日であり、近々三回忌の法要も予定されていたことから、遺族には団より花をお贈りしたことも報告されました。

最後に、最大の行事である第十三回定期演奏会の成功に向けて、皆さんの協力をよりよくお願いします。

## 編集後記

恒例となったリレーエッセイ、次はどなたかな？ と楽しみにしておりましたら、絶妙の人選でした。いただいた文章を楽しく拝読させていただき、ありがとうございました。ご協力に感謝します。

文中の「少しでも気持ちを穏やかに楽しく楽器が吹きたかった」というくだりは、自分でもすると忘れがちになってしまふ思いでもあり、そのことの大切さをあらためて思い出すことができました。

渡辺事務局長の一筆も、いろいろと考えさせられました。個々の団員にはそれぞれの考えがあることですが、この一文を、「シニアらしさ」を前向きに考えるきっかけにしていきたいものです。

第十三回定演まで、あと三ヶ月を切りました。世の中を見渡しますと、目を覆いたくなるような事件やニュースが溢れている昨今です。でも、こういう時だからこそ、今年もみんなが楽しんでみながら、お客様と私たちが音楽を通じて暖かい思いを共有できる演奏会を、作っていこうではありませんか！

（編集長）